



Title	ユニオンの行方 : ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人
Author(s)	服部, 典之
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2018, 52, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ユニオンの行方

——ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人——

服 部 典 之

キーワード：イングランド・スコットランド合同／Brexit／スコットランド文学／ロマン

ティック・ノヴェル／ジェイムズ・ホッグ

1. 始めに

リンダ・コリーの『合同（ユニオン）法とディスユニオン』（2014）（*Acts of Union and Disunion*）によると、現代世界はナショナルなものの支配が浸食されていて、イギリスを始めとしてすでに深い亀裂が生じているヨーロッパのさらなる断片化が巨大な問題として立ちはだかっている。現代社会を覆う断片化は、1707年に締結されたイングランド・スコットランド合同によって成立したユニオン＝統一国家（本論では「イングランド・スコットランド合同」のことも「ユニオン」と表記する）であるイギリスという連合王国にとっても切実な問題であると言えるだろう。本論執筆時点の2018年に手続きが進みつつあるイギリスのEU離脱（Brexit）を巡る問題、また、すでに2014年にスコットランドの独立を巡る国民投票が行われ否決されたとは言え、Brexitを受けて二度目の国民投票が検討されている事態はその典型的な表れと言えるであろう。

スコットランドに問題を絞ってコリーの議論をさらに辿ると、ユニオンを基盤としたグレート・ブリテンという島がネイションであるかどうかについての意見の相違は歴史上常に存在したのであり、異なった国や地域を寄せ集めたグレート・ブリテンに「分裂した性質」が常に存在するのは当然なこととなる。本論はコリーの指摘するイギリスの断片化やイングランド・スコッ

トランド合同というユニオンに対する揺れる気持ちが、スコットランド出身の文学者トバイアス・スモレットとジェイムズ・ホッグの作品にいかにも表れているかを論じることにある。特にホッグの『義とされた罪人の手記と告白』(*The Private Memoirs and Confession of a Justified Sinner*, 1824、以下『罪人の告白』と略記)という小説は1687年から1712年という時代を扱いながらも、この間で最も重要な出来事の一つであった1707年のユニオン締結に全く触れていないという事実が、逆にユニオンへの歪んだ想いを感じさせる作品で、そのゆがんだ想いが強烈な「解体」の物語を作り上げていると考えられる。永らく無視されてきたこの小説がこのところにわかに脚光を浴びることになった理由は、作品が投げかける現代的な断片化の危機と恐怖によるものではないか。本論では、この点を明らかにしたい。

2. つぎはぎされたスコットランド人

始めにユニオンのほぼ半世紀後の1771年にスコットランド人作家スモレットが人生で最後に出した小説『ハンフリー・クリンカーの冒険』(*The Expedition of Humphrey Clinker*)に登場する強烈な奇人リスマヘイゴーというスコットランド人を取り上げたい。ブリテン島を反時計回りに一周旅行をするウェイルズの郷氏ブランブル一行の前にこの奇人が現れるのは、作品半ばのダラムの町においてである。馬に乗って一行の前に颯爽と現れたつもりこの奇人は馬から無様に転げ落ちることで、カツラがとれ、一部が剥がれた頭皮と深い傷跡につぎをあてた、グロテスクな頭をさらけ出してしまう。その頭は「つぎはぎされた」(patched)と書かれ、その傷は彼がアメリカインディアンに捕らえられた時に剥ぎ取られ、斧で受けた傷を治療したつぎはぎの頭だったと後に説明されている。説明箇所を見てみよう。

その伊達男は、地面に転がり落ちて、彼の帽子とカツラがとれ、様々な色をした頭皮を露わにしたのだ。頭皮はつぎはぎをされ、欠けたところ

がつなぎ材で埋めてあった。(『ハンフリー・クリンカーの旅行』 *The Expedition of Humphrey Clinker* [EHC], 188)

スコットランド人であるが故に昇進が叶わずやむなくアメリカに渡ったと思われるリスマヘイゴーは、アメリカインディアンに襲われ、ひどい虐待を受けていたのである。悲惨な迫害の様子を引用してみよう。

一本の指の関節はさびたナイフで切り落とされ、正確に言えばのこぎりで切ったように切り取られていた。片方の親指は二つの石の間で潰されてぐしゃぐしゃになっていた。歯の何本かは曲がり釘で引き抜かれていた。裂かれた革が両鼻や他の敏感な部分にねじ込まれていた。両足の膝は、尖った先を持つ斧を使って皮膚に開けられた穴に爆薬が仕込まれることで吹き飛ばされていた。(EHC, 193)

スモレット特有のグロテスクな表現によって、リスマヘイゴーの身体が物理的に解体されたことが述べられていると言えるだろう。辛酸を嘗めたにもかかわらず傲然と振る舞う彼なのだが、その人生の悲運を引き起こした、不当に扱われるスコットランド性については、極めて捻れた感情を表明している。ブランブル一行の旅の行程はイングランドとスコットランドの国境付近に至っており、そのあたりの家の窓という窓にはスコットランド人への悪口が書き付けてある。境界を接しているからこそ余計に差別意識が強いのだ。それを見て憤懣やるかたないブランブルに対して、リスマヘイゴーは、これだけ悪く言うということは嫉妬の裏返しであって、強力で富裕なイングランド人の注目を集めているということで、自分の故郷を賞賛せざるを得ない、と彼独特の逆説的言辞を弄している。スコットランド人としてのルサンチマン的矜持を持つリスマヘイゴーなのだが、ブランブルが「これから回るスコットランドに出身者である君のご同行を是非お願いしたい」という誘いに対して、自分の行き先は違うと言い、にべもなく断る。自分は若い頃離れただけ

に今のスコットランドの事情は全く分からないので、案内もできなければ著名な人に紹介もできないと言うのである。そして、ブランブルの旅のスコットランド周遊の部分ではリスマヘイゴーは完全に姿を消し、次に彼が現れるのが、一行がダンフリーズを過ぎたイングランド国境付近なのである。

ダンフリーズとカーライルの間の川で馬ごと転倒して溺死しかけて九死に一生を得たリスマヘイゴーは幽霊さながらの姿でブランブル一行の前に再登場するのだ。後で判明したことだが、彼はスコットランドの自分の故郷には行ったのだが、故郷で余生を送ろうとする計画が潰れたらしく、ロンドンから再度アメリカ行きを考えていると言う。溺れかけて再生した彼は永遠にスコットランドを捨てて、新たな場所を求めることになる。実は故郷に帰ったリスマヘイゴーの悲惨なつぎはぎだらけの身体を見た孫が15年前に死んだはずの祖父が幽霊になって帰ってきたと思い込み町中が大騒ぎになり、激怒したリスマヘイゴーが鞭で孫を打擲し、その場を去ったということであった。スコットランドが彼を捨てたのか、彼がスコットランドを捨てたのかは決定不能であるが、彼はもはやスコットランドにとって幽霊＝不在なのである。ホッグの小説の中心にあるべきイングランド・スコットランド合同が小説において空白であるのと同様に、リスマヘイゴーの中心にあるべきスコットランドというトポスは彼の人生行路にあって空白となっていると言えるだろう。

リスマヘイゴーはある時、イングランドとスコットランドがユニオンを行ったことについてブランブルと激しい議論となり、ブランブルがユニオンを礼賛することに猛然と反論する。ブランブルは、リスマヘイゴーに、スコットランドが貧困国家であるという恥辱を払拭しつつあり、それもユニオンの素晴らしい効果であったとユニオンの享受国家スコットランドを賞賛するのだが、リスマヘイゴーはユニオンによってスコットランド人は独立国家を無くし、ナショナルな魂という支柱を失ったのだと主張している。当該箇所を見てみよう。

私は、スコットランド人はユニオンによる敗者だと考えています。スコットランド人は自分たちの国家の独立を失ったわけで、つまり国家精神の最も大きな支柱を失ったということです。議会を失いましたし、裁判所はより優位なイングランドの裁判所の監督下に置かれているのです。(EHC, 277)

本来ユニオンは強固なグレート・ブリテンというネイションを盤石にするべき法律であったはずなのだが、リスマヘイゴーは、スコットランドから見ると、ユニオンによってナショナルなものが解体したということになるのである。

二人のユニオンに関する議論についてはすでに拙著『詐術としてのフィクション』で詳しく論じているのでこれ以上議論することはここでは避けるが、スモレット作品全体に通底する、そもそもくっつかないものをつぎはぎしても、いずれはつないだ糸は解れてくるという考えに繋がる主張をするリスマヘイゴー自身の身体が「つぎはぎ」であることを思い起こすと、ユニオンそのものが脆弱な「つぎはぎ」であることが作品の中で指摘されていることは間違いないであろう。リスマヘイゴーが後にブランブルの初老で独身の妹タビサと結婚（ユニオン）することで、一見ナショナル・ロマンスとしてのユニオンが最終的に実現するかに見えるのだが、ブランブルがウェイルズ人であることを考えると、結婚というユニオンはイングランド・スコットランド合同をずらした形での結末であり、やはり、リスマヘイゴーという存在によって一見一貫性を持つ本作品の「つぎはぎ」性（patched identity）が露呈するのだと言わざるを得ないのである。

3. つぎはぎのホッグ

スモレットの『ハンフリー・クリンカー』という作品は、確かに通常のノヴェルから逸脱しており、「つぎはぎ」の欺瞞を露わにしているとはいえ、

結末は正嫡というアイデンティティの回復であり、婚姻の幸福であるという点で、基本的にノヴェルの本流の「語りのコンヴェンション」を踏襲していると言える。これから考察する『罪人の告白』を含む、ロマンティック・ノヴェルの特徴が「本流のノヴェルの規範を拡張あるいは逸脱しようとした様々な試みを指す」のだとすると、ホッグの身の毛もよだつような悪魔の物語はその典型と言えるだろう。この定義を行った横山茂雄の言葉を見てみよう。

スコットの用いた意味での「ロマンティック・ノヴェル」あるいは「ロマンティック・フィクションという言葉」——それは、ゴシック・ノヴェルを含めて、十八世紀末から十九世紀中葉にかけて本流のノヴェルの規範を拡張あるいは逸脱しようとした様々な試みを指すのに最もふさわしいように思われる。(『異形のテキスト』, 28-9)

ホッグという作家のアイデンティティを考えると、イアン・ダンカンや高橋和久が指摘するように、ホッグを商品として売り出そうとした市場（ホッグ自身が最初にとった戦略であり、後には友人だったはずのジョン・ウィルソンとジョン・ギブソン・ロックハートがそのイメージを濫用した）が作り上げた<エトリックの羊飼い>、つまり才能のある愛すべき田舎者の羊飼い（実際ホッグは羊飼いを生業にしていた）というアイデンティティは、『罪人の告白』という野心的作品を出す1824年には、すでにホッグ自身にとって腹立たしいものとなっていた。本作の主人公ロバートの苦境がアイデンティティを他人に乗っ取られたホッグの苦境を投影したものと解釈している研究者もいる。一例として『罪人の告白』のイントロダクションにあるイアン・ダンカンの考察を挙げよう。

ウィルソンが『夜話』の単独著者権を〔ホッグから〕奪い取ったとき、羊飼いは彼の極めて見事な文学的創造物になった。架空の道化としての

ロマン派の小作人＝詩人の神格化という形で。ホッグは最初この類型化を面白いもののだとしていたが、次第に怒りを覚えるようになった。特に、『夜話』の「酒飲みの道化」が自分の公的アイデンティティとなっていくことに気づき始めると。批評家たちは、ロバート・リンギムの窮境、つまり自分そっくりの者に自分の主体を篡奪される苦痛の土台となっているものを見逃すことはなかった。ホッグが、自分が書簡でウィルソンとロックハートを「2人の悪魔」と怒りを持って触れたことを引用しながら、『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』で自分と彼ら仲間との関係を語っていることにもそれは見られる。また、自分のウィルソンに対する感情を「1人の悪魔が別の悪魔に対して感じるだろう様な気持ちとして恐怖と驚嘆と嫉妬の混じり合った」感情として表現している中にも見られる。（『罪人の告白』、「イントロダクション」、xiv）

『夜話』とは、『アムブロウズ亭夜話』（‘Noctes Ambrosianae’）であり、1822年から『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』に掲載された、エジンバラの文学界と政治を風刺した一連の記事で、＜エトリックの羊飼い＞が執筆者だとされ大好評だったが、実はジョン・ウィルソンとジョン・ギブソン・ロックハートが人気のあるその名を騙って購読者を増やしたものである。

ホッグという一個の人間が＜エトリックの羊飼い＞やシリアスなゴシック小説作家などの複数のアイデンティティに分裂して行くのだ。『罪人の告白』という小説の中では、主人公ロバートが創造（想像）したのかもしれない悪魔は、創造者たるロバートのアイデンティティを蝕んでいく。ロバートは悪魔的存在のギル・マーチンに初めて出会って帰宅すると、母が息子と見分けられないくらい変化している（translated, transformedという単語が使われる）。悪魔に取り憑かれた彼は別人と化し、自分が2人いると感じるようになる。メアリー・シェリーの作品でフランケンシュタインが創造したつぎはぎのモンスターが創造者フランケンシュタインの存在を脅かすように、悪魔に運命を託した瞬間ロバートの一体性は奪われてしまう。そもそも出生が不明であ

るロバートは正嫡である兄ジョージの付け足しであり、無理矢理継ぎ足された存在であり、悪魔がロバートに取り憑くことでさらなる継ぎ足しが行われ、その結果ロバートはバラバラのアイデンティティが無理矢理つぎはぎされたような存在（patched identity）になってしまう。メアリー・シェリーやホッグのロマンティック・ノヴェルはその意味で、本来くっつかないものをつぎはぎして作ったユニオンであるアイデンティティがいかに創造者にとって脅威となり得るかを語る小説であり、「つぎはぎ」の物語であり、さらにその生み出す恐怖を読者に突きつける物語だと言えるであろう。

4. bad marriage というディスユニオン（disunion）

シャーロット・サスマン（Charlotte Sussman）らが編纂した論集『ロマンティック・ノヴェル再考察』（*Recognizing the Romantic Novel*, 2008）が指摘するように、「結婚を基盤としない社会的絆」に「ロマンティック・ノヴェルが関心を寄せる」のだとすると、同論集のローラ・マンデル（Laura Mandell）の言葉を借りるとまさに『罪人の告白』の悪夢的絆を作り出した契機は‘bad marriage’なのであって、その特徴を備えていると言えるだろう。

作品冒頭でジョージ・コルウエンとラビーナが結婚するが、当初からこの結婚は破綻しており、この結婚こそが2人の息子ジョージとロバートの悲劇と悪魔的存在の誕生を促している。『罪人の告白』の10年前にウォルター・スコットが出した『ウエイヴァリー』は、スコットランド人女性ローズとイングランド人ウエイヴァリーの結婚という結末により「両家の〈統合〉による繁栄」を言祝ぐことで、この小説出版の一世紀前に締結されたスコットランド・イングランド合同（ユニオン）を盤石なものとするナショナル・ロマンスであったわけだが、ホッグの本作は『ウエイヴァリー』のユニオン観を大きく覆すものと言わざるを得ない。もっともホッグ作品のコルウエン夫婦の出身は夫がイングランドとの国境（ボーダー）地方で妻がグラスゴーなので、直接イングランド・スコットランド合同には関係しないことは付記

しておかなければならない。

『罪人の告白』では「この結婚は当人たちにとって不愉快極まりない合同となってしまった」(5)と書かれているが、合同を表す英語はconjunctionとなっている。この同じ語(conjunction)という、ダニエル・デフォーが『罪人の告白』の一世紀以上前にイングランド・スコットランド合同を実現すべく活動していた時期に書いたプロパガンダ的詩「カレドニア：スコットランドとスコットランド人を祝する詩」(*Caledonia, A Poem In Honour of Scotland, and the Scots Nation* (1706))で、二つの国の合同のことをこの同じ語で表していることは示唆的であろう。当該箇所を見てみよう。

祝福された結合(conjunction)に幸いあれ。

ブリテンの最後で最良の時間を、カレドニア自身に戻してやろう。

長い間うち捨てられていた彼女の財産、彼女の祝福であり

財産であるもの、すなわち海を彼女の権利として主張せよ。

(*Political and Economic Writings of Daniel Defoe, Volume 4: Union with Scotland*, 235)

またデフォーは『レビュー誌』(*Review*)でもイングランド・スコットランド合同の成就を祝う記事の中で「この文章を書いている途中で、エジンバラ城からこの幸せな結合(conjunction)を宣言する祝砲が撃たれている音を聞いて、私は喜びを覚えた」(*Review*, 29 March 1707, in *Defoe's Review*)と書いており、この語がユニオンを指すものとして使われているのが分かる。また、『ハンフリー・クリンカー』でも初老のタビサが何よりも望んでいる結婚もconjunction(61)と書かれている。1706年、1771年、1824年と時間的に離れた時期の作品であるとはいえ、ユニオンと婚姻の親和性がこの語で表されているように感じられる。

Conjunctionの破綻によって始まる『罪人の告白』では、結びつくものはことごとく否定的様相を帯びている。ロバートの父と結合するのはローガン

という愛人であり、ラビーナ夫人と結合するのは、彼女を熱狂的なカルヴィン派信仰に導くリングム牧師だ。結婚早々家庭内別居をした夫婦にはジョージという長男とロバートという次男が産まれるのだが、作品では弟ロバートの父親が誰か明確に定められていない（状況証拠はたくさんあるのだが）。2人はお互いの存在を知らされないまま別々に育てられる。この兄弟の生い立ちから容易に推察できることであるが、この2人に兄弟愛という絆が生まれようはずもなく、逆に殺し合うほどの敵意を互いに持つようになる。

この兄弟が初めて会うのが、大荒れに荒れた1703年のエジンバラ議会が開かれた時であった。1707年のイングランド・スコットランド合同を決議した前に開かれた議会がこの1703年のものである。議員であるコルウァンに同行したジョージと、同じ場所で名誉革命体制の思想を鼓舞して回るリングム牧師と一緒にやってきたロバートだが、スポーツマンである兄がテニスの試合をする姿を見て、ロバートはあれが実の兄だと知らされる。その際自分のことをロバート・リングム・コルウァンと呼ばれるのだが、コルウァンという名前をロバートは激しく否認している。これは、新婚初夜にリングム牧師にミセス・コルウァンと呼ばれて嫌悪感を示し、顔を背けた彼の母親を強く想起させる姿だ。母と同じく、自分の中のコルウァンというアイデンティティを否定するロバートは、まさしくコルウァンである兄ジョージに悪意を持ってつきまとうようになる。テニスの試合をしている途中、常にジョージの右側におり、球を追って動いた兄に突き飛ばされたロバートは血を噴き出すのだが、ロバートは反撃としてジョージを激しく蹴ろうとする。

ジョージがどこに出かけてもロバートはなぜか必ず姿を現し、つきまとい、追い払うことができず、その執拗で恐ろしい様は、「影」(shadow)や「悪魔」(devil)と呼ばれている。本作品は編者の物語とロバート本人の手記という二部構成になっているが、編者の物語では手記の中で圧倒的な存在であるギル・マーチンという悪魔の存在が前提とされていないので、ロバート本人が悪魔的存在となり、正嫡のジョージを脅かす怪物(monster)として糾弾されているわけだ。ちなみに兄ジョージはジャコバイトであると書かれている

が、1688-9年の名誉革命で放逐されたジャイムズ二世を復位させようとする一派であることになる。同時にユニオンの文脈で言うと、1703年というユニオン成立前の議会開催時に兄弟の激しい諍いが起こったとされ、この時代にジャコバイトが合同案に頑強に反対していたことを考えると、編者の物語ではアンチ・ユニオニストでジャコバイトであるジョージの命が脅かされ最後には殺害されてしまうという展開は、強引なユニオン推進者たちやジャコバイト鎮圧勢力に対する批判として読めるであろう。ただ、分量的に編者より長い、罪人口バートの告白からは政治的文脈はほぼ欠落しておおり、ロバートを支配する強烈な存在であるギル・マーチンを巡って、その煽動に従わざるを得ず破滅していくロバートについての編者による物語より読み応えのある恐怖物語を読むと、上記のアンチ・ユニオン主義を作品全体が明示的に肯定しているとは言にくい。

編者の物語の中で、最後に触れておきたいのは、2人の女性のユニオンである。ジョージが殺害された後、ジョージの母親代わりだったコルウァンの愛人のローガンと殺害現場を目撃した他人カルバート婦人は、真相を知ろうと、ダルカースルの地所にいるロバートの元を訪れる。息子ジョージの死で力を落とした父のコルウァンが亡くなり、ロバートが領地を相続しているわけだ。そこで、ローガンたちはロバートと共に仲良く歩いている男性が他ならぬ殺害されたジョージの姿であるのを見て(後に分かるように悪魔のギル・マーチンが変身してなりすましているのだが)、ローガンはヒステリーの発作に襲われる。ヒステリーは感染力を持ち、カルバート婦人も激しく驚愕し、2人の仲間は固まってしまう。

共謀した2人 (associates) は、そのどちらもが両手を広げ、目を宙に見据えて、顎をあんぐりと開けて胸にまでつきそうな状態で、彫像のようになってしまった。(64)

この後、カルバート婦人が我に返って ‘It is he, I believe’ というと、ロー

ガンが‘It is he!’というヒステリカルな叫びを上げ、その声とユニゾンしてもう1人の女性が‘Yes, yes, it is he!’とヒステリカルに繰り返している。正確に言うと呼応したのはそこに居合わせた宿の女主人で、ヒステリーに感応したわけなのだが、このhysterical unisonはローガンとカルバート婦人と女主人の合同したヒステリーと言えらる。この作品で合同する（と言っても真の意味の合同ではないのだが）のは同性ばかりで、この点を強調した論がセジウィックの『男同士の絆』（*Between Men*）のホッグ論で、彼女の言葉を使うならこの場面は“homosexual panic”（116）の一例だと言えらる。この後悲惨な死を遂げるロバートとすでに死んでいるジョージ2人の幽霊の合同行進を見れば、精神錯乱に女性2人が一致して（ユニゾンで）陥らずにはいられないのも理解できるところである。そもそもはbad marriageで結びついたコルヴァンとラビーナの夫婦は息子2人の死、自分たち自身の死、など様々なディスユニオンを生んでいったのであった。

5. つきまとう2の呪縛

ジョージとロバートという兄弟の2人、ローガンとカルバートという女性たち2人が、物語前半に不吉な2という数字の予兆となっていたが、『罪人の告白』というロバートの語りの中では、執拗に2という数字の呪縛が物語に、そしてロバートに憑依していく。

一番顕著な2が、ロバートに取り憑いた、もしくは彼が誘い込んだ、もしくは彼自身が想像したギル・マーチンとの2人組である。編者の物語ではジョージにロバートが取り憑くという形の2であったが、ロバート自身の告白では彼とギル・マーチンの「ペア」という2となる。

ロバートの告白の中で2人の合同について執拗に主張するのは、悪魔的存在ギル・マーチンである。彼は様々な表現を使って、この合同を確認する。当初は神のようにギルを崇拝していたロバートに対して、当の友人はhysterical unisonと同じunisonという語を使って、ロバートとの調和を喜んで

いる。しかし、ロバートは正義の名の下に殺人を犯すことに誘い込まれるに至って、この存在に懐疑心を抱くようになる。2人目の自分がいるのではないか、それとも自分の身体が統制の効かない魂に憑依されたのではないかと疑い始める。その状態についてロバートは「我々は混じり合い（incorporated together）お互いに同一となった（identified with one other）」（137）のでギルを振り切るのは無理だと書いている。思い詰めたロバートはギル・マーチンに、自分を放っておいてつきまとうのをやめて欲しいと嘆願する。しかしギルは「僕たちの存在はいわば融合しているのであり（amalgamated）、一つの存在の中に合同しているのだ（associated）」（142）と言い放ち、融合した2という数字は決して1+1という別個の存在に分断することはできないと主張するのだ。とすると統一された1というユニオンが実現しているということになるであろうか。自分が他人に乗っ取られたと感じるロバートは1というアイデンティティすら失っているように思われる。彼は自分自身の存在を嫌悪するに至り最終的に捨身するわけだから、2の恐怖は無という0を招来すると言わざるを得ないだろう。2の恐怖はロバートを解体するのである。

ボーダー地方を逃走するロバートを追い詰めたギル・マーチンに、ロバートは世間からつまはじきされた自分のもとから去って欲しいと願う。ギルは、それは不可能だといい、その理由を下記のように、2人の身体も魂もユナイトされて一つなのだからと言っている。

しかし、そんなこと［お互い別れること］を話すのは不可能なことだ。僕は君と強い結婚の絆で結ばれているのであり、僕は君と同じ人間であるように感じているのだ。僕たちの実在は一つであり、僕たちの肉體も魂も合同している（united）ので、僕はまるで磁石に引き寄せられているように君に近づいていく。そして、僕の存在は君と共になくてはならないのだ。（170）

男女のbad marriageで始まった本作は男と男のworst marriageで終わると言え

るであろう。ロバートの絶望に満ちた日記部分で彼は「朝が来る前に自分はバラバラに引き裂かれてしまうのは分かっている」(177)と述べ、自分の「身体が切り刻まれる」(177)と、自分の死を「解体」されることだと認識していることが分かる。

6. 最後に——ユニオンの行方

解体され、ユニオンを失ったロバートが逃走しようとする場所がイングランドであることは、イングランド・スコットランド合同という観点から興味深い事実である。ロバートは「南へ」(157)「イングランドへ」(167)と彷徨し、ボーダー地方を流浪する。ただ、彼は決してイングランドに行き着くことはなかった。この『罪人の告白』の作者ホッグはスコットランド文壇の中で辺境の位置にいたわけだが、「エトリックの羊飼い」というアイデンティティにそぐわない本作はスコットランドで出版されることはなく、ロンドンのロングマン社によって出版された。しかし、以上の本作の読解が示すように、この奇怪な物語はスコットランドの中央からもイングランドの中央からも、本質的に周縁的(peripheral)な存在だったと言わざるをえない。

物語の最後に、ロバートの墓が150年後に編者たちによって掘り起こされ、死体と共に印刷された仮綴じ本が見つかり、それが他ならぬ『罪人の告白』あったことが語られる。ロバートの墓が編者たちによって暴かれたことが象徴的に示すように、またアンドレ・ジッドが1947年に本作を再評価することにより現代に発掘されたことが示すように、埋葬され忘却された死体と本が、周縁からの呪詛を白日の下にさらすことになる。ロバートの自死によって彼に憑依していた悪魔は封じ込まれたように見えるのだが、死体発掘は、悪魔と悪魔の物語を世に解き放つことになる。『罪人の告白』で語られる、悪魔は合同(ユニオン)を強いながらも同時にそれは必然的に解体をもたらすという不吉なヴィジョンは、ユニオンの不安に戦く現代だからこそなおのこと、人々に戦慄をもたらすのだと言えるだろう。イングランド・スコット

ランド合同という政治的事象が内包する危うさが、この小説で描かれる解体の恐怖をはらむつぎはぎされたアイデンティティに表象されているのではないだろうか。

[参考文献]

- Colley, Linda. *Acts of Union and Disunion*. London: Radio 4, 2014.
- Defoe, Daniel. *Caledonia, & A Poem in Honour of Scotland, and the Scots Nation in Political and Economic Writings of Daniel Defoe, Volume 4: Union With Scotland*. London: Pickering & Chatto (Publishers) Limited, 2000.
- _____. *Defoe's Review*, facsimile ed. Arthur W. Second (22 vols. New York, 1938).
- Duncan, Ian. *Scott's Shadow: The Novel in Romantic Edinburgh*. Princeton: Princeton Univ. Press, 2007.
- Hogg, James. *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. Oxford: Oxford Univ. Press, 2010.
- Pittock, Murray. *Scottish and Irish Romanticism*. Oxford: Oxford Univ. Press, 2008.
- Recognizing the Romantic Novel: New Histories of British Fiction, 1780-1830*. Ed. Julian Heydt-Stevenson and Charlotte Sussman. Liverpool: Liverpool Univ. Press, 2010.
- Sedgwick, Kosofsky. *Between Men*. New York: Columbia Univ. Press, 1985.
- Smollett, Tobias. *The Expedition of Humphry Clinker*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1984.
- ジェイムズ・ホッグ『悪の誘惑』、高橋和久訳、国書刊行会、2012.
- 高橋和久『エトリックの羊飼いや、或いは、羊飼いのレトリック』、研究社、2004.
- 服部典之『詐術としてのフィクション——デフォーとスモレット——』、英宝社、2008.
- 横山茂雄『異形のテキスト——英国ロマンティック・ノヴェルの系譜』、国書刊行会、1998.

(文学研究科教授)

SUMMARY

Union and Disunion: The Disintegration of James Hogg's *Justified Sinner*

Noriyuki HATTORI

Since the Act of Union of England and Scotland went into effect in 1707, more than 300 years have passed. But it has never been stable and no happy fusion has occurred, seeing the fact that even today Britain's decision to break from EU in 2016 is not welcome to Scottish people, some of whom are planning a second referendum whereby they can be independent from England again. This paper argues some texts where Scottish people's wavering feelings are expressed prominently.

A Scotsman James Hogg's masterpiece *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824) depicts the society and history of Scotland between 1687 and 1712 during which time 'Union' ought to have been one of the most epoch-making events, but in this novel, it is totally absent. This deliberate omission all the more highlights the impossibility of union (which is the theme of this novel). Hogg was raised as a shepherd and given no proper education, which boorishness heightened his talent as a poet. Indeed, the Scottish literary world amusingly utilized this unique identity and sold their journals including some poems ostensibly by this Ettrick (Hogg's residence in the border country) Shepherd. At the time Hogg wrote *Justified Sinner*, he was disgusted with this identity and tried in vain to establish his serious identity.

Hogg's divided or patched identity is reflected on the protagonist Robert Wringhim. His religious identity was usurped by the demon Gil-Martin. His real self was disintegrated and finally he was obliged to kill his own mutilated body. The horror of being deprived of one's identity and the impossibility of the united coherent body depicted in this novel dampens the opportunistic unionists, and forces us readers to be confronted with the harsh reality of disunion and impossibility of union.